

## 患者が変われば 医療が変わる 医療が変われば 地域が変わる



島根益田がんケアサロン 代表  
C・T・V創生研究所 所長 納賀 良一

1937年5月、石川県金沢市生まれ。同志社大学文学部卒。特殊精密機器メーカーの㈱フジキン総務部部長兼改革推進室リーダーを経て、1994年3月、1ターンで益田市移住。益田ドライビングスクール合宿型システム作りを依頼される(ガイアの夜明けで放映)。その後、C・T・V創生研究所設立。地域で観光、定住、教育、医療など街おこしを実施。2005年12月、全国初のがんサロン開設。

第23回 FFJCP(がん患者会議)に参加して

2015年12月のある日、FFJCP(がん患者会議)から突然メールが入ってきた。中外製薬グループの外郭団体が主催する2016年1月23日〜24日の会議に参加の誘いだ。場所は東京・秋葉原。交通費、宿泊費は全て先方が負担するという。今回で2回

## 米国との患者会の違いに驚き

目の開催になる。全国各地から40団体、90名ほどが集会した。

準備持参するのはがんサロンの活動記録状況を各種学会、研究会と同じようなパネルに展示すること。

1日目、招待者の講演、夕方から交流会の開催。初めてお会いする方が多かった。名刺交換が主たる行動だった。世代交代が感じられた。患者も入れ替わっている。

2日目、アメリカ・マサチューセッツ州の患者相談員ニコラ・ブリジット・トラッピン女史と出会った。

アメリカの患者会は活動的で聞いていたがその訳がなかった。資金力の豊富さが抜群なことだ。社会貢献する企業のなんと多いことか。何かといえば活動する

団体に多額の寄付がなされる。だからその患者会は思うような活動ができるのだらう。医療メーカーに対してはいい薬を依頼している。日本では考えられないこと。羨ましい限りだ。

トラッピン女史とお話する機会があったので、分かったことがいろいろあった。

〈患者を含めた諮問委員会の設置が法律で定められている〉

患者の要望はここから発せられる。

〈外来での患者の呼び方〉 私の街では最近、病院での患者の呼び方が「名前」から「ナンバー」に変更になった。アメリカではナンバーで呼ぶことは人権侵害とまで言われるらしい。ニッ

クネームで呼ぶことも許されている。日本は名前からナンバーへ。まるで逆な印象を受ける。

〈看護師が勤務交代する時の対応〉 ナースステーションではなく、患者のベッドサイドで勤務交代時の引き継ぎを行うことの素晴らしさ。患者も安心。連携ミスも少ないだらう。

〈医師と患者とのワークショップ〉 ときある毎に、医療者と患者が集まって何かと語る場を作っている。

日本では医療者が患者のことを考えてくれているが、小さな親切、大きなお世話といえるようなことが多い。やはり患者の声を聞き、当事者目線から、物事を考えることが必要だ。

まで言われるらしい。ニッ